

平成22年度 学内研究助成金 研究報告書

研究種目	<input type="checkbox"/> 奨励研究助成金	<input type="checkbox"/> 研究成果刊行助成金
	<input type="checkbox"/> 21世紀研究開発奨励金 (共同研究助成金)	<input checked="" type="checkbox"/> 21世紀教育開発奨励金 (教育推進研究助成金)
研究課題名	東アジアの言語教育と文化研究の再構築 —関西における中国語・韓国語の教育・研究の拠点づくりに向けて—	
研究者所属・氏名	研究代表者：林君穂 共同研究者：大西博子・大東和重・須賀井義教・好並晶・酒匂康裕	

1. 研究目的・内容

本研究は、平成20・21年度に学内研究助成金・21世紀教育開発奨励金（教育推進研究助成金）に採択された研究「語学教育と異文化研究のインターフェイス」・「語学教育のデバイスとしての異文化研究」（研究代表者はいずれも山取清）の延長線上で、特に中国語・韓国語の教育と研究に特化し、一、本学における東アジア言語教育のあり方を再構築し、二、東アジアの文化研究において本学の研究者が果たす役割を向上させることの二点を主要な目的として展開した。

2. 研究経過及び成果

本研究を展開するに際し、研究代表者1名・分担者5名、助成金交付決定後に趣意に賛同して集まった6名（新任教員を含む）の、本学教員計12名によって、「東アジア言語教育研究会」を結成、共同研究を展開した。共同研究者は、その多くが旧語学教育部に所属し、現在は経営・経済・文芸・総合社会・理工・法・短期大学部の、計7学部にも所属する。

研究会が平成22年度に展開した活動を簡略に紹介する。活動は大きく2種の取り組みに分けられる。

- ① 研究例会を開催、共同研究者全員が報告などを行う
- ② 学生向けパンフレット『東アジアの言葉の海へ』を作成する

上記の活動のうち、①の研究例会は、平成22年度に計6回開かれた。

第1回例会 6.3 Thu. 12:30-13:10 出席者：11名

今後の展開について討議

第2回例会 7.28 Wed. 15:00-18:00 出席者：11名

授業報告1：大東「映像で中国語圏を旅する 語学授業における異文化理解」
+ピアレビュー

関連文献講読1：比嘉政夫『沖縄からアジアが見える』（岩波書店、1999）

パンフレット原稿報告1：各自

第3回例会 9.8 Wed. 15:00-18:00 出席者：11名

授業報告2：酒匂「韓国語短期留学のカリキュラム」 +ピアレビュー

関連文献講読2：野間秀樹『ハングルの誕生 音から文字を創る』（平凡社、2010）

パンフレット原稿報告2：各自

第4回例会 10.31 Sun. 14:00-18:00 出席者：9名

授業報告3：今後の語学カリキュラム編成に向けて

総合社会学部（好並・須賀井）、経済学部（大西）、短期大学部（田中）

関連文献講読3：金文京『漢文と東アジア 訓読の文化圏』（岩波書店 2010）

パンフレット原稿報告3：各自

第5回例会 12.23 Thu. 14:00-18:00 出席者：11名

関連文献講読 4：小林英夫『戦後アジアと日本企業』（岩波書店、2010）

パンフレット原稿報告 4：各自

第 6 回例会 3.30 Wed. 15.00-16:00

研究会の総括

例会は休・祝日もしくは休暇中に、午後 2 時もしくは 3 時から開始、毎回 3～4 時間以上を費やした。毎回共同研究者ほぼ全員が参加、報告後に活発な討議がなされた。例会の内容を分類すると、

1. 中国語・韓国語教育担当者による授業報告
2. 中国語・韓国語カリキュラム作成に関する討議
3. 中国語・韓国語の教育と研究に関連する研究文献の講読
4. 学生向けパンフレット『東アジアの言葉の海へ』原稿の報告

の 4 種である。本年度の研究例会はまず、中国語・韓国語科目において各共同研究者が試みている、授業内での工夫についての報告から始めた。これと関連して、次に、現在本学で施行されているカリキュラム、また今後実施・策定予定のカリキュラムについて、報告と意見の交換を行った。これらと同時進行の形で、東アジアの言語教育と文化研究に関わる書籍の講読を行った。さらに、学生向けパンフレット作成を目指して、毎回原稿の報告を行い、内容について討議した。

研究例会では、参加者が本学における東アジア言語の教育と文化の研究について、各自の専門や担当言語の特色を生かし、お互いに刺激となる報告や講読、討議を行った。その結果、本学における東アジア言語の教育や文化の研究をより深め、将来的に関西における東アジア研究の拠点を目指す研究の蓄積を図る場となった。本研究会は FD 活動の一環としても機能しており、各報告と討議を経て、平成 23 年度以降に開講される授業が、学生に対しより刺激のあるものとなることが期待される。

②の学生向けパンフレット『東アジアの言葉の海へ』は、本研究会のメンバーが多く関わった、平成 20 年度に学内研究助成金・21 世紀教育開発奨励金（教育推進研究助成金）に採択された研究「語学教育と異文化研究のインターフェイス——外国語教育と異文化理解講義の相互補完的な展開を目指して」（研究代表者：山取清）において作成された、学生向けパンフレット『ことばへの招待状』の延長線上で作成された。対象を東アジアの言語を学んで一定期間を経た学習者に限定、本学で中国語・韓国語を学ぶ 2 年生以上の学生に向けて、中国語・韓国語の言語の性質や、学習方法、参考になる図書、さらに共同研究者たち自身の異文化体験を紹介し、学生たちにより積極的な外国語学習・異文化体験を促すものとなっている。

平成 23 年度以降の授業において配布の予定で、学生たちの東アジア言語学習や異文化体験への格好の手引きになると期待される。これについては研究成果の一部として現物を添付・提出する。

以上のように、「東アジア言語文化研究会」は、本研究会の母体で平成 20・21 年度に活動した「異文化理解教育研究会」同様、FD 活動の一環としての機能も果たしつつ、共同研究者が各自の専門や担当言語の特色を生かして、情報や意見を交換し、お互いを刺激しあう場となった。特に、平成 21 年度をもって本学の外国語教育・研究機関であった語学教育部が解体、平成 22 年度から各学部に分属となったため、情報の交換や相互の交流が困難になった現状では、本研究会の存在意義は大きく、本学における東アジア言語の教育と文化の研究を強力に推進する研究会になったと自負している。また、研究例会の開催やパンフレットの作成は、本学における東アジア言語文化関連の授業と密接に関連しており、その内容は学生へと直接還元されるものである。

以上のように、研究と教育が一体となった活動を展開することができたのも、東アジア言語の教育と文化の研究に対する本学の理解の賜物である。研究助成金の交付に感謝したい。

3. 本研究と関連した今後の研究計画

本研究は、平成 20・21 年度に学内研究助成金・21 世紀教育開発奨励金（教育推進研究助成金）に採択された研究「語学教育と異文化研究のインターフェイス」、「語学教育のデバイスとしての異文化研究」（研究代表者はいずれも山取清）を、東アジアの言語の教育と文化の研究に特化する形で展開した。平成 22 年度から語学教育部は解体し、各言語の担当教員は各学部に分属となった。

だが、以上の研究を推進した「異文化理解教育研究会」、及び「東アジア言語文化研究会」は、23年度以降も活動を継続する予定である。また、本研究の成果である、東アジア言語の教育の実践は、23年度以降も複数の学部で展開されており、学生に配布されるパンフレットは学生たちに東アジアの言葉の海へと漕ぎ出す海図を提供するだろう。本学で外国語、中でも東アジア言語の教育に従事する教員にとって、これらの研究会は今後も互いに知見を披露し刺激を与え合う、貴重な教育研究の場として機能することが期待できる。

4. 成果の発表等

発表機関名	種類(著書・雑誌・口頭)	発表年月日(予定を含む)
『東アジアの言葉の海へ』	学生向けパンフレット	平成23年3月31日